研究動向

留学と文学

謝　惠貞

近代の留学生たちは、異文化接触により、現地の思想・文化・制度などを受容し、さらにメディア・政治を媒介に、それを伝播・変革して、新体制を創生する担い手となってきた。文学研究の観点から見ても、その体験がもたらす諸影響や作品における表象などを読み解く際に、重要な手がかりとなる。紙幅の都合上、ここ十年の蓄積を振り返り、日本や日本文学と関連する東アジアの戦前作家の研究のうち、日本語で記述されたものを中心に紹介したい。

まずは、注目度の高い作家の個別研究から見たい。漱石の文学論については、イギリス留学で吸収した諸理論との比較研究が一つの焦点であるが、野網摩利子編『世界文学と日本近代文学』(東京大学出版会、19・11)は、影響研究の枠組みから離れ、世界文学の脈絡に位置付けた論考を5編も収録している。例えば、漱石がロンドン滞在中、ウイリアム・ジェームズを介して、同地にいたガートルード・スタインと奇妙な交差を見せたという着目点は斬新だ。次に、美留町義雄『軍服を脱いだ鷗外　青年森林太郎のミュンヘン』(大修館書店、18・7)は、ヨーロッパ近代都市の様相や芸術思潮も交えて留学時代の鷗外を描き、近代との葛藤を指摘することで、まだ実証の余地を残す鷗外研究に日独比較文学・文化論からのアプローチを試みた。また、岸川俊太郎「洋行帰国後の永井荷風：全集未収録作品二篇を中心として」(『アジア・文化・歴史』5号、17・5)は、書簡の翻刻などを通して、空襲に遭った心境や谷崎との交流を解明した。児島春奈「永井荷風『ふらんす物語』「放蕩」における「かぶれ」へのまなざし―「緑の郊外」から「郊外」へ―」(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』29-1、21・9)は、荷風が、貞吉の「ふらんすかぶれ」は「田舎かぶれ」と同様に、パリ中心主義を内面化していると捉え、「中心」と「周縁」の枠組みを問い直したという言説構造を解析した。

この他にも、網倉勲「米国・英国留学体験と水上瀧太郎文学」(『青山語文』48号、18・3)は、実業と文学を両立した水上の文明批評という特色を、留学での思索から探究した。随筆「貝殻追放」は、新聞記事の捏造や、軍部官憲を批判し、憂国や個人主義文学につながると説いた。斎藤禎『文士たちのアメリカ留学』(書籍工房早山、18・12)は、大岡昇平、庄野潤三、安岡章太郎、江藤淳などが、ロックフェラー財団の奨学生に選抜され、民主と言論自由を体感したことで、思想がいかに変化をしたかを分析した。留学後、大岡が『ザルツブルクの小枝』、庄野が『ガンビア滞在記』、安岡が『アメリカ感情旅行』、江藤が『アメリカと私』を残したが、戦争体験者である彼らの敗戦後の思想変遷も、今後の研究課題になり得るだろう。

このように、日本人留学生が欧米に越境して感じた差異・差別、独自の意味付けは、日本近代文学に大いに寄与し、同様に、東アジアから日本への留学生もまた、それぞれの文学史において重要な存在となった。東アジアの関連研究では、中国人留学生に関連する研究が最も多いと推察される。なぜなら、中国の

近代文学を論じる上で、魯迅や創造社、革命文学理論など、日本への留学生や日本文学が与えた影響の分析を避けて通ることはできないからである。関連研究の豊富な蓄積によって、研究が深化を遂げている。

例えば、鳥谷まゆみ『夏丏尊と日本：宏文学院留学と小品文受容を中心に』(『立命館経済学』64-4、16・2)と潘世聖『弘文学院留学期の魯迅における日本受容：新発見の『宏文学院講義録』を手掛かりに』(『中国：社会と文化』34号、19・7)は、いずれも東京・宏文学院で接した知的啓蒙言説により作家の思想を再解釈したものである。前者は、水野葉舟『小品文練習法』と花袋『美文作法』を志向し、小品文教育を推進したと解明した。後者は、丘浅次郎の進化論の受容が、魯迅の進化論観念＝国民性改造論の源泉であると論証した。曽小蘭『身辺小説から見た郭沫若と郁達夫の革命文学：両者における留学時代の体験から』(日本比較文化学会『比較文化研究』146号、22・1)は、雑誌のプロレタリア文学への転向を巡って、創造社に所属した両者の意見が分かれた理由を、それぞれの私小説に探った。また、知中派の日本の学者に関する研究も認められる。余禕延『竹内好の文学観の形成：北京留学を契機として』(『立命館文學』662号、19・3)は、竹内が留学した後、日本の占領下にあった北京を見たことで、日本自然主義や私小説に由来する文学観を、政治の渦中に生きる人間像全体の感情を描くように変化させたと指摘した。

さらに、大東和重編集の『野草』一〇二号「中国人日本留学生文学特集」(中国文芸研究会、19・3)は、蘇曼殊と崖山の亡国の悲しみ、周作人と大逆事件や荷風との遭遇、郁達夫と旧制高校、陶晶孫の大東亜文学者大会参加、満洲国作家である但娣の描く「日本」などの論考を収録している。林麗婷『中日近代文学における留学生表象―二〇世紀前半期の中国人の日本留学を中心に―』(日中言語文化出版社、19・8)は、南武野蛮、張資平、崔万秋、佐藤春夫、太宰治、大城立裕による留学生の表象を論じた。作品の時代背景の論証を重視し、比較文学・文化の視点から掘り下げたことが、多くの発見につながっている。

上記は、いずれも既存の留学生の実態に関する研究に基づいて、文学観の形成や思想の変化などに着目し、深く掘り下げて探究したものである。また、少数民族の留学者による研究の萌芽も窺える。例えば、エルドン・バートル「日本留学時代におけるサイチョンガ文学論考―浪漫的激情と啓蒙思想」(『東洋学研究』58号、21・3)は、内蒙古近代文学史における最初の詩集『心の伴侶』を留学中に出版した作家を紹介するとともに、彼の散文集『砂漠、我が故郷』を分析し、実篤や日本古典の日記文学からの影響を受け、自民族を復興させる祈願を込めた作品であると論じた。

次に、資料的価値の高い4冊を見て行く。小谷一郎『一九三〇年代中国人日本留学生文学・芸術活動史』(汲古書院、10・11)と『一九三〇年代後期中国人日本留学生文学・芸術活動史』(同、10・11)は、社会科学研究会、青年芸術家連盟、「東京左連」(中国左翼作家連盟東京支部)、校友会、演劇仲間など多数の留学生の文化活動の細部を、実証的に掘り下げた。特に東京左連は、日本左翼が弾圧された時代に、日本の江口渙などと交流して自在な活動を展開していた。筆者の知る限り、台湾人作家の呉坤煌もこの左連に関わっている。想定した時間範囲

をやや超えてしまったが、当時の東アジアの文芸を考察するには、左翼文芸活動を理解することが重要で、その細部を知るために有益な資料となる。その後の研究も『中国文芸研究会会報』に二〇一八年まで連載されている。また、神奈川大学人文学研究所の日中関係史共同研究グループが手がけた5冊のうち近刊2冊を見てみる。孫安石、大里浩秋編『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』（東方書店、19・3）は、清国の衰退に危機感を覚えた留学生が、日本の自負する近代性に接近し、自国の民族問題を解決しようとした背景に着目した。支援団体（励志会、清国人留学生会館）、翻訳・出版活動（中華学芸社『文芸』、訳書彙編社）が勃興した様相を検証しているが、日本側が対中関係で行った事業、満洲国留日学生会、対支文化事業の特別講習会、東亜／東京同文書院といった組織、上記の活動の戦後への連続性、欧米留学者との比較など、今後さまざまな角度からの研究が待たれる。また、両氏の『明治から昭和の中国人日本留学の諸相』（同、22・3）は、明治期については、留学開始の橋渡しとなったメディア・教育機関に着目し、『日本遊学指南』、旗人留日学生が発行した『大同報』、帝大教授の寺尾亨が開設した「東斌学堂」、正則英語学校などを検討した。大正・昭和期については、『日華学報』、東京大学文書館『諸向雑件』、『留日東京高等工業学校同窓会年刊』など、日本側の各教育・交流機関の刊行物から、その実態を究明した。日中戦争期については、留学生による日本研究団体、太平洋学社・上海日本研究社と日本研究雑誌の『黒潮』（北京）、『日本』・『日本研究』（上海）などを研究したが、中でも注目すべきは、実篤の「新しき村」に参加した袁素一の活動、また小林多喜二や徳永直への評価である。

このような実績を踏まえ、明治から昭和にかけての研究数を比較すると、作家の留学実態を考証する研究は、「留学生小説」研究に引けを取っていない。また、雑誌や教育機関の資料などを発掘し、留学生が新思想・革命・社会運動と接触した実態を解き明かした功績も高く評価できる。

さらに、交流の実態を双方向から考察した研究もある。例えば、裴亮『中国〝嶺南〟現代文学の新地平：文学研究会広州分会および留学生草野心平を中心に』（花書院、14・3）は、機関誌『文学』を活用し、地域の文学活動と日本の詩人、草野心平との異文化交流を解明した。稲森雅子『開戦前夜の日中学術交流――民国北京の大学人と日本人留学生』（九州大学出版会、21・4）は、三〇年代に中国留学した倉石武四郎、長澤規矩也、吉川幸次郎、目加田誠、小川環樹らが、中国研究の分野で先駆的な業績を残したのに対し、中国側の孫楷第、馬廉は、白話古典の価値に注目し、日本での調査に基づいて新しい分野を切り開いた軌跡を検証した。特に興味深いのは、馬廉が長澤と競い白話古典版本を研究し、倉石と共同で挿絵写真集も作成して、鄭振鐸『挿図本中国文学史』に転載されたという論考である。

上記のように中国人日本留学研究が活況を呈している要因については、高田幸男による孫安石ら編著書の書評（『アジア教育史研究』、30号、21・3）を参照されたい。その要因としては、新概念の伝播者としての位置付け、大学史研究における中国人留学生の歴史への注目、日中交流史の諸相の解明に対する機運の醸成、アジア歴史資料センターや『日華学報』などの史料公開の加速、関連研究に取り組む中国人研究者の増加などが挙げ

られている。

韓国関係に注目すると、波田野節子『韓国近代作家たちの日本留学』『韓国近代文学研究――李光洙・洪命憙・金東仁――』（共に白帝社、13・10）は、留学生の学籍簿や回覧誌『極秘新韓自由鍾』を発掘し、韓国近代文学を主導する上記の3文豪を論じた。山本実彦・菊池寛・山崎俊夫と李との交友、獄中生活後の洪作品の「朝鮮情調」への転向、泡鳴の理論・木村毅『小説研究十六講』に影響を受けた金の創作観などは、重要な実証研究として韓国の学界でも高く評価されている。洪宗郁「京都留学生朴済煥の生涯と実践――文学青年、社会主義、植民地官僚――」（『韓国学研究（韓国語）』20号、16・2）は、高麗共産青年会運動に身を投じた文学青年の朴済煥が弾圧を受け、社会主義者を経て再び植民地官僚に転じた過程を分析し、民族と階級に揺れ動き、抵抗と妥協のバランスを模索する朝鮮知識人の様相を示していると指摘した。田中美佳『朝鮮出版文化の誕生――新文館・崔南善と近代日本』（慶應義塾大学出版会、22・10）は、日本の出版の盛況に圧倒され、「日本で雑誌編集や執筆活動を通して青年を啓蒙するだけでは飽き足らず」、崔が朝鮮初の本格的な出版社・新文館を設立し、初の近代雑誌『少年』を創刊したとその経緯を解明した。武断政治から文化政治へと植民地統治政策を切り替えた時代背景や検閲への対策を検討した点が興味深い。

台湾関係に目を向けると、拙著『横光利一と台湾――東アジアにおける新感覚派（モダニズム）の誕生』（ひつじ書房、21・12）は、日・中文学史の新感覚派研究と対話し、台湾文壇がいかに横光を受容したかを考察した。楊逵による横光「純粋小説論」から通俗性の重視と文芸大衆化の交差、台湾初の意識の流れ小説の創生、台湾人による上海新感覚派の成立などを解明した。さらに、韓国の李箱との比較を通して、東アジア規模での留学生たちに見る移植の権力（ヘゲモニー）関係、文体構築、ジェンダー規範の挫折などを検討した。

上記のうち、植民地統治を受けた韓国と台湾は、いずれも文化の創生期における受容で、日本からの「借り物」としての言語、思想、社会制度を巡って、植民地のアンビバレンスの様相を呈している。

東アジアに視野を広げた研究を見てみると、和田博文など編『〈異郷〉としての日本：東アジアの留学生がみた近代』（勉誠出版、17・10）は、近代への憧憬と帝国主義への幻滅の狭間に生きる東アジア留学生が、新たに獲得した思想・表現で、その革命・民族・自我への目覚めの軌跡を地域の関係性と共にどのように描いたかを概観した。

以上のことからわかるように、留学生（文学）研究は、一昔前は、近代化やナショナリズムの視点による研究が多かったが、近年は、留学生たちが直面した理想と苦悩、作品における論理の矛盾と亀裂を読み解くことを重視するようになってきた。彼らが、伝統と近代の矛盾と格闘し、羨望と抵抗に揺れながら築いた思想・表象は、重層的で複雑であるからこそ、多角的な視点からの研究が大いに展開可能である。また、今後の展望として、新資料の発掘による研究の深化、文学観・日本表象の変遷研究、複眼的な枠組み／研究協力による（再）解析が期待できると考える。

ISSN 0388−3884

昭和文学研究

第 87 集

特集　身体を再考する——規範化し、攪乱する文学
左川ちか研究——攪乱される詩的生態系…… 川崎　賢子　(2)
〈孕む身体〉の闘争
——松田解子『女性線』と無産者産児制限同盟…… 中谷いずみ　(17)
物質が語る死体をめぐる構造
——バタイユのアンフォルムで読む安部公房と久生十蘭…… 李　先胤　(33)
家畜の生と人間の身体
——土路草一「潰滅の前夜」「魔教圏No.8」論 …… 河原　梓水　(44)
三島由紀夫「三熊野詣」論
——〈独身〉者・折口信夫像を書き換える力…… 有元　伸子　(59)
戦後文学における〈老いる身体〉との対峙と逃避
——有吉佐和子『恍惚の人』と大西巨人『迷宮』から…… 橋本あゆみ　(74)
観客の身体の拘束・挑発——寺山修司「観客席」論…… 久保　陽子　(89)
「別空間」への想像力——崎山多美「アコウクロウ幻視行」論 … 佐久本佳奈　(104)
否定性の共同体のために
——『薬を食う女たち』、「ドラッグ・フェミニズム」、
そして、五所純子の書く行為について…… 水川　敬章　(120)
自由論文
林芙美子「兵隊の詩」をめぐって
——帯紙・パラテクスト・メディア…… 野田　敦子　(135)
石川淳『白描』論
——日中戦争下の民芸運動・青年・芸術をめぐって…… 別當　奏　(151)
太宰治「ヴィヨンの妻」論
——「仮名手本忠臣蔵」への接近と離脱…… 齋藤　樹里　(167)

研究動向
獅子文六（岩田豊雄）…… 佐藤貴之　(182)
宮本百合子…… 池田啓悟　(190)
留学と文学…… 謝　恵貞　(198)
岡本かの子…… 野田直恵　(186)
中野重治…… 廣瀬陽一　(194)

研究展望
『上海文学 復刻版』と戦時中国の日本語文学 …… 木田　隆文　(202)
好きなところで、くつろいで研究してください
——国文学研究資料館の文学手稿デジタル化事業について…… 多田　蔵人　(205)
『坂口安吾大事典』以後の安吾研究…… 山路　敦史　(208)
映画と文学の横断——アダプテーションとしての『劇場版ごん』…… 友田　義行　(211)
近現代文学研究の将来に向けて——「宮沢賢治で卒論・修論書いてみる？」の試み…… 信時　哲郎　(215)
〈書評〉
胡逸蝶著『芥川文学における帝国主義批判の再検討　その思想の展開と特徴をめぐって』… 小谷　瑛輔　(219)
佐藤未央子著『谷崎潤一郎と映画の存在論』…… 五味渕典嗣　(223)
大原祐治著『戯作者の命脈　坂口安吾の文学精神』…… 原　卓史　(226)
和田敦彦編『職業作家の生活と出版環境　日記資料から研究方法を拓く』…… 高橋　孝次　(230)
柳井宏夫著『性格破産者の系譜　広津和郎論』…… 中山　弘明　(234)
藤田佑著『小説の戦後　三島由紀夫論』…… 久保田裕子　(237)
外村彰著『犀星文学　女ひとの形象』…… 須田　久美　(240)
渡邊英理著『中上健次論』…… 早川　芳枝　(244)
鈴木貴宇著『〈サラリーマン〉の文化史　あるいは「家族」と「安定」の近現代史』…… 松下　浩幸　(247)
高橋幸平・久保昭博・日高佳紀編『小説のフィクショナリティ　理論で読み直す日本の文学』… 山本　亮介　(251)
岡村民夫・赤坂憲雄編『イーハトーブ風景学　宮沢賢治の〈場所〉』…… 中村　晋吾　(254)
深澤晴美著『川端康成　新資料による探究』…… 堀内　京　(258)
岩川ありさ著『物語とトラウマ　クィア・フェミニズム批評の可能性』…… 藤木　直実　(261)
飯田祐子・中谷いずみ・笹尾佳代編著
『プロレタリア文学とジェンダー　階級・ナラティブ・インターセクショナリティ』…… 榊原　理智　(264)
石川巧著『読む戯曲の読み方　久保田万太郎の台詞・ト書き・間』…… 赤井　紀美　(267)
武内佳代著『クィアする現代日本文学　ケア・動物・語り』…… 金井　景子　(270)
栗山雄佑著『〈怒り〉の文学化　近現代日本文学から〈沖縄〉を考える』…… 尾西　康充　(274)
〈新刊紹介〉…… (277)
西田谷洋著『文学教育の思想』
新・フェミニズム批評の会編『〈パンデミック〉とフェミニズム　新・フェミニズム批評の会 創立30周年記念論集』
仁平政人・原 善編著『〈転生〉する日端康成Ⅰ　引用・オマージュの諸相』
有元伸子・府中市上下歴史文化資料館 編『岡田（永代）美知代著作集』
田村景子著『希望の怪物　現代サブカルと「生きづらさ」のイメージ』
千葉一幹著『失格でもいいじゃないの　太宰治の罪と愛』
青木（秋枝）美保・前田貞昭編著『井伏鱒二未公開書簡集　ある級友への手紙』
受贈図書
会務委員会だより…… (282)
『昭和文学研究』バックナンバー電子公開のご報告…… (290)
日本学術会議の問題をめぐる昭和文学会の対応について…… (292)
編集後記…… (293)

昭和文学会

昭和文学研究　第87集　特集　身体を再考する——規範化し、攪乱する文学　令和五（二〇二三）年九月

ISBN978-4-305-00387-4
C3393 ¥4200E

定価：本体4,200円（税別）

Showa Bungaku Kenkyu No. 87
(Showa Literary Studies)

FEATURE ARTICLES: Rethinking the Body: Literature of Normitivization and Disruption
1. The Deconstruction of Biopolitics in the Poetry of Sagawa Chika …… KAWASAKI Kenko
2. The Struggle of the Pregnant Body: Matsuda Tokiko's *Josei-sen* and The Proletarian Birth Control League (*Puro BC*) …… NAKAYA Izumi
3. Materialism and the System Behind Dead Bodies: Reading Abe Kobo and Hisao Juran Through Georges Bataille's Concept of Formlessness …… LEE Sunyoon
4. The Life of Livestock and The Body of the Human: Tsuchiro Soichi's "*Kaimetsu no zenya*" and "*Makyoken No. 8*" …… KAWAHARA Azumi
5. Mishima Yukio's "*Mikumano mode*": Modifying the Image of a "Single" Orikuchi Shinobu and Women as Witness …… ARIMOTO Nobuko
6. Confronting and Escaping "The Aging Body" in Postwar Japanese Literature: Ariyoshi Sawako's *Kokotsu no hito* and Onishi Kyojin's *Meikyu* …… HASHIMOTO Ayumi
7. Restraining and Inciting the Audience's Body: Terayama Shuji's "*Kankyakuseki ron*" …… KUBO Yoko
8. Imagining Other Spaces: Sakiyama Tami's "*Akokuro genshiko*" …… SAKUMOTO Kana
9. Towards an Uncertain Community: On *Kusuri o kuu onnatachi*, "Drug Feminism," and Gosho Junko's Acts of Writing …… MIZUKAWA Hirofumi

ARTICLES
1. On Hayashi Fumiko's "*Heitai no shi*": Dustcover Obi, Paratext, Media …… NODA Atsuko
2. Ishikawa Jun's *Hakubyo*: On the Folk-arts Movement, Youth, and Art during the Sino-Japanese War …… BETTO Kanade
3. Dazai Osamu's "*Viyon no tsuma*": Approaching and Breaking from "*Kanadehon chushingura*" …… SAITO Juri

RESEARCH TRENDS
1. Shishi Bunroku …… SATO Takayuki
2. Okamoto Kanoko …… NODA Naoe
3. Miyamoto Yuriko …… IKEDA Keigo
4. Nakano Shigeharu …… HIROSE Yoichi
5. Study Abroad and Literature …… HSIEH Hui Chen

RESEARCH PROSPECTS
1. *Shanhai bungaku: fukkokuban* and Japanese-Language Literature in Wartime China …… KIDA Takafumi

日本学術会議の問題をめぐる昭和文学会の対応について

昭和文学会常任幹事会は、内閣府の「日本学術会議の在り方についての方針」に対し、二度声明を発しました。この対応について説明します。

二〇二二（令和四）年一二月六日に、内閣府は、「日本学術会議会員の任期も踏まえ、できるだけ早期に関連法案の国会提出を目指す」「会員等以外による推薦などの第三者の参画」する措置を講じる等の内容を含む「日本学術会議の在り方についての方針」を発表しました。

この「方針」に対し、昭和文学会は常任幹事会名で、同年一二月二〇日にホームページ上に、「学問の自由を堅持するために、内閣府の「日本学術会議の在り方についての方針」を憂慮するとともに、日本学術会議総会（二〇二二年一二月八日、二一日）での議論を注視し、関連法案の国会提出の中止を求めます。」という声明を掲載しました。

同年一二月二一日には、日本学術会議が、声明「内閣府「日本学術会議の在り方についての方針」（令和四年一二月六日）について再考を求めます」を出しました。

これについても昭和文学会は、同年一二月二六日に、日本近代文学会、日本社会文学会、日本文学協会とともに四学会共同の声明を出しました。ホームページにも掲載した声明文は以下のとおりです。

「二〇二二年一二月二一日に日本学術会議から発表された声明「内閣府「日本学術会議の在り方についての方針」（令和四年一二月六日）について再考を求めます」に賛同する。／日本近代文学会理事会／昭和文学会常任幹事会／日本社会文学会理事会／日本文学協会運営委員会」

政府は、二〇二三年四月二〇日、日本学術会議法改正案の国会への提出を見送ることを決めました。

昭和文学会常任幹事会

＝編集後記＝

第八十七集の特集「身体を再考する―規範化し、撹乱する文学」は、投稿論文も含めて九本の掲載という、たいへん充実したものになりました。本特集では、身体の物質性と表象の関係が問われています。身体性はどのように認識され、どのように制度化され、どのように歴史化されてきたのか。また文学表現は、それらの構成にどのように関与し、それをどのように問題化し、またどのように撹乱してきたのか。「身体」は継続的に分析対象とされてきましたが、本号の特集の中からキーワードの一部を拾い出してみれば、動物化、堕胎、死体、家畜化、クィア、戦争、劇場空間、劇場化、ジェンダー、セクシュアリティなど、身体の物質性が様々な新しい視点から検討されています。ご寄稿くださった執筆者のみなさまに、深くお礼を申し上げます。

第八十八集の特集は「「音」と文学」です。学会外からサウンド・スタディーズの研究者にもご参加いただいて、座談会を企画しています。楽しみにしていただければと思います。今号の投稿論文については、特集・自由論文合わせて二六本のご投稿があり、そのうち、六本を採択することができました。採択率は二三％となりました。

最後に、本誌のバックナンバーの電子化事業について、ご報告いたします。前号にて、第一集～第五十五集までの公開に向けて、作業を進めていることをお知らせいたしましたが、それが完了いたしました。これで、創刊集から、直近集の一集前にあたる第八十五集までを、「J-STAGE」にて公開することができました。今回の作業で、目次もアップロードいたしました。記事名のみですと、特集名を示すことができず、特集論文と自由論文の区別もできませんが、目次からそれらの情報を得ていただけると思います。『昭和文学研究』のこれまでの歩みを把握していただきやすくなったと思います。これにて、数期にわたって引き継いできたデジタル公開事業が、遂に完了しました。ご協力くださった、すべてのみなさまに、心より感謝申し上げます。

昨今、生成AIにどのように向き合うかということが、研究や教育の現場でも具体的に問題になっています。デジタル・ツールの多様性や精度は、驚くべきスピードで進化していますので、研究論文を掲載する学会誌も、今後それらへの対応が必要になるかもしれません。みなさまのお知恵を拝借して参りたいと思います。

（飯田祐子）

第八十七集編集委員

荒井真理亜　小嶋　洋輔
飯田　祐子　竹田　志保
泉谷　瞬　田中　裕也
和泉　司　谷口　絹枝
生方　智子　戸塚　学
大島　丈志　西村　将洋
大原　祐治　日高　佳紀
尾崎名津子　広瀬　正浩
押野　武志　村上　陽子
倉田　容子　山田　夏樹

昭和文学研究　第87集
令和五（二〇二三）年九月一日発行
編集　昭和文学会編集委員会
発行　昭和文学会
代表幹事　佐藤秀明
Tel　〇三―五九七六―一四七八
http://www.swbg.org/
振替　〇〇一二〇―七―一一〇四五二
発売　笠間書院
〒101-0064 千代田区神田猿楽町二―二―三　NSビル内
Tel　〇三―三二九五―一三三一
Fax　〇三―三二九四―〇九九六